

《史料研究》

戦後教育改革期の未発行教科書『東洋の歴史』の内容構成について

茨木 智志

はじめに

本稿は、戦後教育改革期中等学校用に一種検定本教科書として作成されながら未発行に終わった『東洋の歴史』の書誌に関わる情報を整理するとともに、その内容構成の復元を目指すものである。

『東洋の歴史』は中等学校用に1947年度に発行が目指されていた、新学制下の教科課程（教育課程）に基づいた社会科「東洋史」のための東洋史教科書である。文部省から執筆を移管された中等学校教科書株式会社において、6人の東洋史研究者の委員が占領軍と協議をしながら執筆を進めた。原稿は完成したようであるが、先に発行された『西洋の歴史（1）』の問題により、『東洋の歴史』は発行が許可されず、その後も文部省と占領軍との間で原稿の修正を重ねながらも、ついに未発行に終わっている。

本稿では、『東洋の歴史』に関する各種情報、執筆と頓挫、その後の修正作業の概要、史料の状況などを確認した上で、占領軍の史料に残されている英語訳の原稿から、この『東洋の歴史』の編・章・節に加えて、項までの内容構成の復元に努めたい。

1. 『東洋の歴史』に関する情報の整理

『東洋の歴史』は発行が数年にわたり広く予告されながらも未発行に終わった教科書である。1947年度用教科書目録（1947年4月発行）から記載され¹、1948年度用教科書目録（1948年4月発行）では内容の概要が第1巻は「概説・古代・中世前期」、第2巻は「中世後期、近世現代」と「備考」で記載されて発行が予告されていた²。1949年度用教科書目録（発行年月日欠）では、「新編さん、昭和23年度中に発行予定であるが未許可のものである」と注記され³、1950年度用教科書目録（1949年8月発行）では、「予定頁数」を付して未発行であることを暗に示しながら掲載している⁴。1951

¹ 『昭和二十二年四月 昭和二十二年度使用中等学校教科用図書目録』文部省、1947年4月。後に2分冊での発行が決められたが、ここでは3分冊での発行を記載している。

² 『昭和二十三年四月 昭和二十三年度使用高等学校教科用図書目録』文部省、1948年4月。

³ 『昭和二十四年度使用 高等学校教科書目録 その一』文部省、発行年月日欠。

⁴ 『昭和二十四年八月 昭和二十五年度使用 高等学校普通学科用教科書目録』文部省、1949年8月。

年度用教科書目録（1950年4月発行）では、「予定」も「未許可」の文字もなく、記載されている⁵。しかし、それでも発行はされなかった。なお、1949年4月からはすでに「世界史」が高校で実施されており、1952年度用教科書目録（1951年5月発行）で初めて「世界史」検定教科書が記載されて、ようやく『東洋の歴史』の名が教科書目録から消えた⁶。それまでの間、文部省には『東洋の歴史』発行に関する問い合わせが多く寄せられたという。公的に存在した『東洋の歴史』に関する情報は、これらの教科書目録の記載がすべてであった。

その後、1960年代に入り、執筆者の回想の中で『東洋の歴史』についての言及が現われる。特に、三上次男の発言は貴重である⁷。1980年代からは研究対象として取り上げられた。茨木智志は、占領軍の史料を利用して『東洋の歴史』の作成過程の概要と編・章・節までの内容構成を示して教科書としての性格の検討に着手した⁸。吉田寅氏は高校「世界史」成立前後の教科書・準教科書の分析の中で、『東洋の歴史(1)』の構成を示して当時の執筆の背景を概観した⁹。片上宗二氏は、占領軍の史料に加えて『東洋の歴史』をはじめ『西洋の歴史』『人文地理』を含めた執筆者たちからの聞き取りや日記などを駆使して、作成過程の詳細や教科書の概要を提示した¹⁰。

『東洋の歴史』は『西洋の歴史』とともに、戦後の新学制下の社会科外国史の正式な一種検定本教科書としての発行が予定されていた。戦後における、その後の東洋史・西洋史の記述や、1949年4月から実施された「世界史」の記述に対して、間接的ながら様々な影響の存在が推測される。ただし、後述するように、未発行に終わった『東洋の歴史』の原稿は、日本語のものが発見されておらず、保存状態のあまりよくない英語訳のものが占領軍の史料に残されているだけである。そのため、教科書としての詳細な分析は現在も課題となっている。

2. 『東洋の歴史』の執筆と頓挫の経緯

1946年中に新学制の検討とともに新しい教科課程の検討が文部省と占領軍との間

⁵ 『昭和26年度使用 教科書目録 高等学校普通学科用』文部省、1950年4月。

⁶ 『昭和27年度使用 教科書目録 高等学校用』文部省、1951年5月。

⁷ 「座談会 戦後教科書物語—検定制度発足まで— 歴史教科書とその時代1」『季刊歴史教育研究』第19号、1961年4月。ただし、三上の発言には、前後関係に若干の混乱があり、一部で歴史教科書とは別な会合の内容を紹介しているなどの錯誤もあると推測される。

⁸ 茨木智志「世界史教育の成立過程に関する一考察」筑波大学提出修士論文、1986年。同「成立過程における世界史教育の特殊性について」『筑波社会科研究』第6号、1987年。

⁹ 吉田寅「『世界史』成立前後の教科書・準教科書について」『立正大学人文科学研究年報』第28号、1991年。

¹⁰ 片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房、1993年。本稿では『東洋の歴史』作成経緯に関して、本書853～859頁を特に参照させて頂いた。また、同「高校社会科「選択科目」の成立過程」（『歴史と地理（日本史の研究）』第135号、山川出版社、1986年12月）などが『東洋の歴史』を取り上げている。

で着手された。この中で、社会科を含めた戦後の教科課程が決定する。後に新制高校となる第 10～12 学年では、高校 1 年次に総合的な「社会」（「一般社会」）を学び、2～3 年次に「東洋史」「西洋史」「人文地理」「時事問題」の選択科目を学ぶこととなった。教科書は作成しないとされた「時事問題」を除く、3 科目の教科書の作成は文部省から中等学校教科書株式会社に移管されることとなり¹¹、「東洋史」では和田清を中心に、守屋美都雄、周藤吉之、松本善海、市古宙三、三上次男の 6 名が執筆者の委員に任命された¹²。この委員会は「東洋史」の学習指導要領も作成している。

1946 年 11 月から作業は開始される¹³。委員会が作成した教科書概要 (outline) は、占領軍である CIE（民間情報教育局）教育課の同意をなかなか得ることができなかった。それは、「東洋」(the Orient) の歴史であるのに、委員会は「中国」の歴史を書こうとしているという理由であった¹⁴。一応、12 月中に教科書概要の許可は出されるが、東洋史の範囲を広げることは、その後も問題となった¹⁵。分担された原稿執筆は、比較的早く進行したようであるが、執筆経緯の詳細は不明である。執筆者の三上次男と CIE 教育課のボウルズ (L. J. Bowles) が原稿についての話し合いの担当となっている。数か月の空白の時期を経て、1947 年 5 月に原稿の検討が再開された旨の報告がなされ¹⁶、6～8 月に作業が進められた。8 月終わりにはまもなく版を組む許可が出されると報告されているが¹⁷、このときに許可は出なかった¹⁸。

この間の 8 月に、『西洋の歴史 (1)』（中等学校教科書株式会社、1947 年）が発行され、10 月には印刷と配布を終えていた。この『西洋の歴史 (1)』の中のキリスト教の福音書についての記述が 1947 年 12 月頃からカトリック教会の非難を受け、1948 年 2 月までの期間において、マッカーサーを巻き込んだ日米にまたがる大問題となった。問題そのものはマッカーサーからの回答書簡により表面的には沈静化した。その後

¹¹ Conference Report, 28 Oct. 1946, CI&E, GHQ/SCAP Records、国立国会図書館憲政資料室 [CIE(D)01784]。以下、Conference Report 等については、年月日と国立国会図書館憲政資料室所蔵のシート番号のみを記載する。

¹² 前掲「座談会 戦後教科書物語—検定制度発足まで— 歴史教科書とその時代 1」、5 頁。また、三上次男『世界史 東洋史編』（中等学校教科書株式会社、1949 年）の「序」で東洋史の委員について紹介している。さらに、片上宗二・前掲『日本社会科成立史研究』では執筆者からの聞き取りにより確認している（764 頁）。

¹³ Conference Report, 15 Nov. 1946 [CIE(D)01783]。また、このときの初の会合に関しては、前掲「座談会 戦後教科書物語—検定制度発足まで— 歴史教科書とその時代 1」が詳しい。

¹⁴ Conference Report, 10 Dec. 1946 [CIE(A)00701]。

¹⁵ 1948 年 2 月時点でも問題とされている (Weekly Report, 20 Feb. 1948 [CIE(C)07150])。

¹⁶ Weekly Report, 22 May 1947 [CIE(B)06653]。

¹⁷ Weekly Report, 29 Aug. 1947 [CIE(C)07111]。

¹⁸ 片上宗二氏は、オズボーン (M. L. Osborne) か、ハークネス (K. M. Harkness) からのクレームがあったのではないかと推測している (片上宗二・前掲『日本社会科成立史研究』855～856 頁)。なお、「東洋史」の学習指導要領は 7 月に発行されていた。

の占領軍の過敏とも言える対応は学校に少なからぬ混乱を残した¹⁹。このあおりを受ける形で、『西洋の歴史 (2)』と『東洋の歴史 (1)』『東洋の歴史 (2)』の発行許可は見合される。

その一方で、『東洋の歴史』の原稿修正は継続した。修正の担当は、上記の執筆者から文部省に移され、文部事務官であった箭内健次らとボールズとの検討が断続的に進められた。1949年4月から「東洋史」「西洋史」ではなく、「世界史」が実施されていたにもかかわらず、正式な教科書は1947年発行の『西洋の歴史 (1)』のみであった。「世界史」の検定教科書発行も予定以上に遅れていたため、文部省と占領軍は「補助教材」として発行しようとしていたと推測される。箭内健次とボールズとの『東洋の歴史』原稿の最後の検討は1950年2月頃から再開された²⁰。特に20世紀初頭前後から戦争終結までの中国をめぐる日本と欧米の関係の記述が問題とされている²¹。この検討が5月まで続いて、原稿は一応の完成を見たようである²²。しかしながら、結局のところ未発行に終わることになる²³。

また、これとは別に、三上次男は1947年秋に中等学校教科書株式会社から「東洋史の教科書的な中級概説書の執筆」依頼を受け、この『東洋の歴史』での「共同作業の経験にたよって、かねがねいたっていた東洋史に関する構想を展開し、翌23年〔昭和23年、1948年：引用者注〕の春早々これを書き上げ²⁴」ている。この本は、三上次男『世界史 東洋史編』(中等学校教科書株式会社、1949年8月)として発行された²⁵。なお、本書は、『東洋の歴史』の原稿と「東洋史」学習指導要領を「もと」として作成されたものと受けとめられており²⁶、正式な教科書ではないながらも「世界史」授業

¹⁹ マッカーサーや米国を巻き込んだ『西洋の歴史 (1)』の問題については、西鋭夫『マッカーサーの『犯罪』 秘録日本占領』上巻(日本工業新聞社、1983年、44～45頁)が詳しい。この間の経緯やその後の占領軍の対応については、茨木智志・前掲「世界史教育の成立過程に関する一考察」(131～135頁)が取り上げ、さらに、片上宗二・前掲『日本社会科成立史研究』(842～845頁)が詳細に考察している。また、その後のカトリック教会による『西洋の歴史』への対応については、茨木智志「上智大学編『西洋史上の諸問題—「西洋の歴史」への補遺—』について」(『歴史教育史研究』第8号、2010年)を、『西洋の歴史』の内容構成の詳細などについては、同「中等社会科「西洋史」教科書『西洋の歴史 (2)』の英語原稿についての基礎的考察」(『総合歴史研究』第47号、2012年)を参考されたい。

²⁰ Conference Report, 23 Feb. 1950 [CIE(B)06659]。

²¹ Conference Report, 4 Apr. 1950 [CIE(B)06659] など。

²² Conference Report, 12 May 1950 [CIE(B)06659]。

²³ 「世界史」実施後における『東洋の歴史』発行に向けての文部省と占領軍の動きについては、茨木智志「成立期における高校社会科「世界史」の特徴に関する一考察—科目の設置と文部行政による対応に焦点を当てて—」(『社会科研究』第72号、2010年)を参照されたい。

²⁴ 三上次男『世界史 東洋史編』中等学校教科書株式会社、1949年8月、「序」。

²⁵ この三上次男『世界史 東洋史編』は、翌年の1950年4月には『世界史 東洋史編(学生版)』(中教出版)として発行された。

²⁶ 吉田寅『世界史教育の研究と実践』教育出版センター、1986年、43～44頁。なお、板倉勝正『世界史 西洋史編(学生版)』(中教出版、1950年)の「序」では「底本」は『西洋の歴史』であると

用の準教科書として広く利用された²⁷。

3. 『東洋の歴史』の英語原稿の状況

『東洋の歴史』の日本語原稿は現時点で発見されておらず、確認できるのは次の英語訳の原稿のみである。

①History of the Orient- Upper Secondary, Vol. I, May 1950, CI&E, GHQ/SCAP Records, Box no. 5546 (国立国会図書館憲政資料室, CIE(A) 04321- CIE(A) 04323)。

②History of the Orient- Upper Secondary, Vol. II, May 1950, CI&E, GHQ/SCAP Records, Box no. 5546 (国立国会図書館憲政資料室, CIE(A) 04324- CIE(A) 04326)。

上記の①が『東洋の歴史 (1)』、②が『東洋の歴史 (2)』の原稿となる。ボールズの報告などが添付され、教科書としては「目録」(目次)と本文はあるが、挿絵や図表などはない。発行された『西洋の歴史 (1)』の体裁を見ると、中表紙に続いて3頁の「目録」、「序説」以下の157頁の本文、6頁の年表(1945年の分まで)、奥付という構成になっており、本文中に挿絵が30枚、表が1枚、地図が8枚記載されている。『東洋の歴史』も同様の挿絵などを含めた構成が予定されていたはずである。前述の教科書目録(1950年度用と1951年度用)では、『東洋の歴史 (1)』・『東洋の歴史 (2)』ともに「128頁」と明記されているため、ある時点では印刷のための割り付けも完了していたと考えられる²⁸。

英語原稿では『東洋の歴史 (1)』が本文119頁、『東洋の歴史 (2)』が本文177頁となっている。なお、頁の数字は用紙の下に手書きで記載されている。文中には多くの書き込みが見られる。また、修正は紙片の貼り付けや用紙の追加でもなされている。特に『東洋の歴史 (2)』の後半部分に多い。上記のように、同じ「128頁」であったはずの『東洋の歴史 (1)』と『東洋の歴史 (2)』が、英語原稿で大きく頁数が異なっているのは、『東洋の歴史 (2)』で追加の修正が多くなされた結果であると推測される。ただし、編・章・節・項に注目すると、内容構成に対する大きな修正はなかったとも推測される(後述)。

日付が1950年5月となっているように、原稿としては最終段階のものと考えられる。

述べている。ただし、本稿で検討した『東洋の歴史』の内容構成と、三上次男・前掲『世界史 東洋史編(学生版)』の内容構成とを比較すると、異なる部分も少なくない。

²⁷ 三上次男・前掲『世界史 東洋史編(学生版)』を含めた「世界史」の準教科書については、吉田寅・前掲「『世界史』成立前後の教科書・準教科書について」および茨木智志「準教科書に見る初期の世界史教育の模索」(『社会科教育論叢』第47集、2010年)を参照されたい。

²⁸ この「128頁」は、『西洋の歴史 (1)』の「168頁」という記載を考慮すると、中表紙から年表の終わりまでの奥付を除いたすべての頁数であると推測される。ただし「128頁」は、比較的早い段階での数字であると考えられるが、どの時点であるのか確認できない。

つまり6人の執筆者の委員の作成した原稿を、後日に文部省の箭内健次らがボールズと協議して修正したものとなる。最後の節である「朝鮮と東南アジアの現状」への追加の執筆について、この原稿に添付された覚書に記載があり²⁹、これが原稿の記述に反映している。

英語原稿の形式や用語の使用法は、統一されていない。東洋史の紙面の多くを占める漢字で表記される王朝名・人名・地名等の用語は、中国語読みのウェード式のローマ字表記を基本としながら、一部に日本語読みでのローマ字表記が混在している。同じ語句でも前後で表記方法の異なるものも少なからず見られる。また、基本語句の誤表記も散見される。翻訳者も翻訳の時期も章や節により異なっていたと推測される。なお、報告書や回想では、遅れがちな翻訳と専門用語の知識のない通訳について嘆かれている。

史料の保存状態はあまり良好ではない。そのため文字の存在が確認できるだけの箇所も少なくない。

4. 『東洋の歴史』の内容構成の復元作業 — 掲載史料の凡例として —

本稿では、『東洋の歴史』の内容構成をより詳細に示すために、これまでに紹介されてきた編・章・節に加えて、節の下にあたる項までの復元を行なう。

『西洋の歴史(1)』では、本文157頁の中で「序説」に続き、4編・14章・46節の中に196の項が設定されており、項の題目は太字で印刷されている。なお、同書の項は、わずか4行のものから、2頁におよぶものまで内容の量には幅がある。『東洋の歴史』も同様に想定されていたと考えられる。

『東洋の歴史』の英語原稿での項の記載は、題目を括弧でくくる形式を基本としながら、1行あけて段落を変えたもの、すべてを大文字で記載したもの、手書きで挿入されたものなどが混在している。そのため、適宜に項であることを判断した。稿末の史料では、すべてを括弧でくくる形式で記載し、題目は基本的に原文のままとした。ただし、すべてを大文字で記載しているものは読みやすさを配慮して名詞の頭文字を大文字とする形式とした。なお、保存状態が悪い箇所では見落としている項も少なくないと考えられる。特に『東洋の歴史(2)』の後半の一部は、保存状態の悪さに加えて修正のための用紙の挿入などが多いため文の流れがほとんど確認できず、項の確認が難しい。

判読できない箇所は下線()で示した。また、文字が読み取れないが、前後から推測した部分、文字の脱落や錯誤と判断して補った部分は二重下線()を付した。

英語原稿での該当頁を[]で記載した。頁番号が判読できない箇所は、前後から補った。用紙が挿入された部分には「143a」「143b」などのような記載が一部に存在する。

日本語訳は茨木の仮訳である。訳語の選定に際しては、先行研究を参照すると共に、

²⁹ Memorandum, 12 May 1950, History of the Orient—Upper Secondary, Vol. II [CIE(A)04324].

「東洋史」の学習指導要領³⁰および三上次男『世界史 東洋史編（学生版）』（中教出版、1950年）での用語を基本的に採用した。『東洋の歴史』の5つの編の題目と記述対象の範囲は、「東洋史」学習指導要領の5つの単元に対応している³¹。『東洋の歴史』の項の題目も、学習指導要領の各単元の「教材の範囲」の記載と対応しているが、ただし編・単元によって対応の程度は異なる。興味深いことに、特に『東洋の歴史』の「第三編」と「東洋史」学習指導要領の「単元三」は非常によく対応している³²。参考として、稿末の史料では、「東洋史」学習指導要領に記載された表現をそのまま当てたものには〔○〕を、部分的に当てたものには〔△〕を日本語訳の右に付した。そのためもあり、日本語訳では、「住民」・「庶民」・「人々」、「文明」・「文化」、「儒教」・「儒学」、「西方」・「西洋」、「中亜」・「中央アジア」、「蒙古」、「満州」、「イスパニア」など、英語原稿の用語との不一致や現在一般的ではない用語の使用、一部の訳語の不統一が生じている。なお、特に記号等は付けなかったが、三上次男が分担執筆したと思われる『東洋の歴史』の「序論」と「第一編」は、三上の『世界史 東洋史編（学生版）』の記載と対応している部分が多い。

本稿で確認できた項などの数をまとめると以下ようになる。

表：『東洋の歴史』（1950年5月）の編・章・節・項などの数

	本文					頁数
『東洋の歴史 (1)』	序論	2 編	7 章	21 節	143 項	119 頁
『東洋の歴史 (2)』	—	3 編	9 章	22 節	167 項	177 頁
(合計)		5 編	16 章	43 節	310 項	296 頁

注1：本稿掲載の史料1・史料2により作成。項の数は確認できたもののみである。

注2：「頁数」は英語原稿のものであり、追加された紙数を含まない。

おわりに

本稿では、『東洋の歴史』の各種情報、執筆と頓挫の経緯、修正作業、史料の状況について概観し、検討の結果を含めて、その内容構成を稿末に史料1・史料2として掲載した。以上の検討作業を通して推測されるのは、複数の原稿の存在である。1946年末以来の最初に執筆された原稿、1949年8月に各「128頁」と教科書目録に記載された原稿、占領軍の史料に残されて本稿で取り上げた119頁と177頁の英語原稿のもと

³⁰ 『学習指導要領 東洋史編（試案）昭和二十二年度』著作兼発行者・文部省、翻刻発行者・中学校教科書株式会社、1947年7月16日翻刻発行。

³¹ 「西洋史」の場合は、教科書の編と学習指導要領の単元とでは、題目の表現の仕方が異なる。

³² ちなみに『西洋の歴史 (1)』の場合、4つある編のうちで第三編を除く3つの編の項が「西洋史」学習指導要領の各単元の「教材の範囲」の記載と非常によく対応している。『西洋の歴史 (2)』を含めた『西洋の歴史』教科書の「西洋史」学習指導要領との対応については、茨木・前掲「中等社会科「西洋史」教科書『西洋の歴史 (2)』の英語原稿についての基礎的考察」を参照されたい。

になる最後の原稿の少なくとも3種、あるいは、それ以上の種類の原稿の存在が考えられる³³。これらは、その時々々の教育、研究の状況に加えて、内外の政治の動向が記述に反映していたと予測される。

内容構成の分析は稿を改めたい。なお、このような不十分なものを敢えて掲載するのは、どこかに存在するはずの複数種の日本語原稿の発見を期待するためである。識者のご教示をお待ちする次第である。

(本稿作成に関連して、多くの方々のご教示を頂戴した。記して感謝を申し上げる。)

³³ ただし、可能性の一つとして、英語原稿のみが存在する段階も想定することができる。

史料1：『東洋の歴史 (1)』の内容構成 (稿)

凡例

- ・ 出典は、History of the Orient- Upper Secondary, Vol. I, May 1950, CI&E, GHQ/SCAP Records, Box no. 5546 (国立国会図書館憲政資料室、CIE(A)04321- CIE(A)04323) である。
- ・ 記載は、編・章・節・項についての英語原稿での題目、[英語原稿での該当頁]、日本語訳である。見やすさに配慮して、編・章・節の日本語訳の記載を太字にした。
- ・ 作成者の注記は〔 〕で記載した。
- ・ 日本語訳に「東洋史」学習指導要領の記載をそのまま当てはめたものには〔○〕を、記載の一部を当てはめたものには〔△〕を付した。
- ・ 凡例に関わるその他の詳細は本稿「4」を参照されたい。

Introduction How are the Land and People in the Orient[1]

序論 東洋の土地と住民はどのようなものであるか

Preface[1]序説

Chapter 1. How are the Land and People in the Orient [2]

第一章 東洋の土地と住民はどのようなものであるか¹

Section 1. The Land and People of the Orient[2]

第一節 東洋の土地と住民

(Five Geographical Zones) [2] 五つの地理区

(Three climatic zones) [3] 三つの風土帯

(People of Asia) [4] アジアの住民

Section 2. Natural Features of China[7]

第二節 中国の自然の特色

(China, an Independent Zone) [7] 中国、一つの独立した地域

(Five Geographical Sections) [7] 五つの地理区

(Climate) [8] 気候

(Soil) [8] 土壌

(North China and South China) [9] 北部中国と南部中国

Part 1. How the Ancient Civilization was formed in the Orient[10]

第一編 東洋の古代文化はどのようにして成立したか〔○〕

Introduction ²[10]序説

Chapter 2. How the Oriental Civilization was Generated[12]

第二章 東洋の文化はどのようにして発生したか³〔○〕

¹ 「第一章」の章・節・項の題目は、三上次男『世界史 東洋史編 (学生版)』(中教出版、1950年)の「序論 東洋の土地と住民」に対応するところが多い。

² 「目録」(Content)では「Preface」となっている。

³ 「第二章」の節・項の内容は、三上次男・前掲『世界史 東洋史編 (学生版)』の「第二章 東洋文化

Section 1. The Origin of the Human Civilization in the Orient[12]
第一節 東洋における人類文化の起源〔△〕
(Early Palaeolithic Age) [12] 初期旧石器時代
(Later Palaeolithic Age) [12] 後期旧石器時代
Section 2. The Civilization of the Neolithic Age and its Development[13]
第二節 新石器時代の文化とその発達〔△〕
(India and the Southern zone) [13] インドと南方地帯
(Central Plain zone) [13] 中央平原地帯
(Northern zone of Forest) [14] 北方森林地帯
(Yellow River zone) [14] 黄河地帯
(Painted Pottery Civilization) [14] 彩陶文化
(Black Pottery Civilization) [15] 黒陶文化
(Advancement of the Neolithic Civilization in the Yellow River region) [16] 黄河新石器文化の発展
Chapter 3. How Ancient China had Developed[18]
第三章 古代の中国はどのようにして発展したか〔○〕
Section 1. Culture of Yin Dynasty[18]
第一節 殷の文化〔△〕
(Central field region) [18] 中原
(Rise of Yin) [18] 殷の興起
(Letters and bronze tools) [19] 文字と青銅器
(Living) [20] 生活
Section 2. The Rise of the Chou Dynasty[22]
第二節 周の勃興〔△〕
(Organization of the feudal system) [22] 封建制度の組織
(Daily life and culture) [24] 日常生活と文化
Section 3. The Periods of Spring and Autumn and of Warring States[26]
第三節 春秋・戦国時代〔△〕
(Spring and Autumn Period) [26] 春秋時代
(Duke Huan of Chi) [26] 齊の桓公
(Chin and Chu) [27] 晋と楚
(Wu and Yueh) [27] 呉と越
(The Warring states period) [28] 戦国時代
(Situation of the Seven Powers) [29] 七雄の状況
Section 4. Society and Culture in the Spring-and-Autumn and the Warring states periods[30]
第四節 春秋・戦国時代の社会と文化〔△〕
(Social and Cultural Change) [30] 社会と文化の変化
(Importation of the western civilization) [30] 西方文化の移入

の黎明」に対応するところが多い。

(Importation of the northern civilization) [31]北方文化の移入

(Invention of iron-foundry) [32]製鉄業の発明

(Agriculture and commerce) [32]農業と商業

(Social Life) [33]社会生活

(Development of Thought and Learning) [33]思想と学問の発展

(Confucius) [34]孔子

(Mencius) [34]孟子

(Motsé) [35]墨子

(Lao-tse and Chuang-tse) [35]老子と荘子

(Hsun-tse and School of Legists) [35]荀子と法家

(Other Scholars) [36]その他の学者

Chapter 4. How the Chinese Empire was Unified[37]

第四章 中華帝国はどのように統一されたか [△]

Section 1. The Unification of the Chinese Empire under the Chin Dynasty[37]

第一節 秦朝下の中華帝国の統一

(Expansion of the Chin State in the Warring States Period) [37]戦国時代における秦の拡大

(Administration of Emperor Shih Huang-ti) [38]始皇帝の政治

(Foreign Expedition) [39]対外遠征

(Fall of the Chin Empire) [40]秦の滅亡

Section 2. Rise and Fall of the Han Dynasty[41]

第二節 漢の興亡

(Rise and Fall of the Han Dynasty and Progress for Unification) [41]漢の興亡と統一の進展

(Foreign Expansion in the Reign of Emperor Wu) [42]武帝時代の対外膨張

(Strengthening of Regulation and completion of Unification) [43]統制の強化と統一の完成

(The Hsin Dynasty) [44]新

(The Change of the Later Han Dynasty) [45]後漢の変化

(Fall of the Later Han Dynasty) [45]後漢の滅亡

Section 3. Society and Culture[46]

第三節 社会と文化 [△]

(Social Construction) [46]社会構造 [○]

(Organization of the Government) [47]政治組織 [○]

(Finance and Conscription) [48]財政と兵役

(Industries and Industrial Arts) [48]産業と技術 [○]

(Life of the People) [49]人々の生活

(Thought and Science) [50]思想と学術 [○]

(Fine Arts) [52]美術

Chapter 5. Ancient India and Buddhism[54]

第五章 古代インドと仏教

Section 1. Ancient India and Foundation of Buddhism[54]

第一節 古代インドと仏教の創始

(Indus Civilization) [54] インダス文化 [○]
(Aryan Invasion into India) [54] アーリヤ人のインド進入 [△]
(Eastward Expansion of the Aryans) [55] アーリヤ人の東進
(Upanishad philosophy) [56] ウパニシャッド哲学
(Foundation of Buddhism) [57] 仏教の創始
(Prosperity of the Magadha State and Development of Literature) [57] マガダ国の繁栄と文学の発展

Section 2. Unification of India and Situation of Western Countries[59]

第二節 インド統一と西方諸国の状勢

(Persian Invasion into India and Eastern Expedition of King Alexander) [59] ペルシアのインド侵入とアレキサンドル王の東方遠征
(Maurya Dynasty) [59] マウリヤ王朝
(King Asoka, a Patron of Buddhism) [60] アショカ王、仏教の保護者
(Invasion of Foreign People into North-western India, and Rise and Fall of the Kushana Dynasty) [61] 外国人の西北インド侵入とクシャナ王朝の興亡
(Hinayanist Buddhism to Mahayanist Buddhism) [62] 小乗仏教から大乘仏教へ
(Fine Arts of Gandhara) [62] ガンダーラ美術 [○]

Part II. How had⁴ the Culture of Orient Distributed[64]

第二編 東洋の文化はどのように拡充したか [○]

Preface[64] 序説

Chapter 6. How did the Northern Tribes Invade China[65]

第六章 北方民族はどのようにして中国に侵入したか [○]

Section 1. Wei Chin Period[65]

第一節 魏・晋時代

(The Inception of Tri-Powers) [65] 三国の始まり
(Tri-Powers Rivalry) [65] 三国分立 [△]
(Expansion of Chinese Power During the Tri-Power Period) [66] 三国時代の中国勢力の拡大
(West-Chin & Wu Hu) [67] 西晋と五胡
(The Establishment of East Chin and its Significance) [67] 東晋の建国とその意義
(Five Fues and Sixteen Nations) [68] 五胡十六国
(Rise and fall of Ton-Chin) [68] 東晋の興亡

Section 2. Southern and Northern Dynasties[69]

第二節 南北朝

(General aspects of the period of the Southern and Northern dynasties) [69] 南北朝時代の概観

⁴ 「目録」では「was」となっている。

(Rise and Fall of the Southern Dynasty) [69]南朝の興亡
(Rise and Fall of the Northern Dynasty) [70]北朝の興亡
(Situation in the Korea and Japan) [71]朝鮮と日本の状況
Section 3. Society and Culture in the Era of the Northern and Southern Dynasties [72]

第三節 南北朝時代の社会と文化

(Social Problem) [72]社会問題
(Changes of land system) [72]土地制度の変化
(Advent of Influential Families) [73]豪族の出現
(Development of Influential Families) [74]豪族の発展
(Culture of Six Dynasties) [75]六朝文化
(Confucianism) [76]儒教
(Pure Discussion) [77]清談
(Development of learning) [77]学問の発展
Section 4. Development of Buddhism in East Asia [80]

第四節 東亜における仏教の発展 [△]

(Buddhism in the period Wei and Wu dynasties) [80]魏・呉時代の仏教 [「魏・晋時代」か]
(Buddhism in the period the Northern and Southern Dynasties) [82]南北朝時代の仏教 [△]
(Origin of Buddhism Sects) [82]仏教宗派の起源
(Arts of Buddhism) [82]仏教芸術 [△]
(Establishment of Taoism) [83]道教の成立
(Spread of Buddhism) [85]仏教の伝播
Chapter 7. How the Oriental Culture Developed and Extended [86]

第七章 東洋の文化はどのように発展拡充したか [○]

Section 1. The Era of Sui and Tang [86]

第一節 隋・唐時代

(Rise and Fall of Sui Dynasty) [86]隋の興亡
(The role played by Sui Dynasty) [86]隋の占めた役割 [△]
(Expeditions of Sui Dynasty) [87]隋の遠征
(The Rise and Decline of Tang Dynasty) [88]唐の盛衰
(Havoc of Wu and Wei) [88]武韋の禍
(Tang's prosperity and Rebellion of An and Shih) [89]唐の繁栄と安史の乱
(Decline and Fall of Tang Dynasty) [90]唐の衰亡

Section 2. Foreign Relations of Tang [91]

第二節 唐の対外関係

(Situation of the North, Turk) [91]北方の形勢、突厥 [△]
(Situation of the north; Uigur) [92]北方の形勢、ウイグル
(Tang's administration of the Western Region) [93]唐の西域統治
(Situation in the West; Tibet) [93]西方の形勢、チベット
(Situation on the West, Nan chao) [94]西方の形勢、南詔
(Southwest Asia and Arabia) [95]西南アジアとアラビア
(Southern Countries) [97]南方諸国

(International relations in the East, Korea) [98] 東方との国際関係、朝鮮 [△]
(Unification of Korean Peninsula) [99] 朝鮮半島の統一
(Pohai and its Civilization) [100] 渤海とその文化
(Japan in Tang period) [100] 唐代の日本 [○]
(General tendencies in the Orient) [101] 東洋の趨勢
Section 3. Tang's System and Social Economy⁵[102]

第三節 唐の制度と社会経済

(Outline of system) [102] 制度の概要
(Government Organization) [102] 政治組織
(Legislation) [103] 法典
(Military system) [103] 兵制
(Educational system) [104] 教育制度
(Examination engaging officials and Powerful families) [104] 科挙と貴族 [○]
(Land system) [105] 土地制度
(Tax system) [106] 税制
(Production of the Food and Fuel) [106] 食料と燃料の生産
(Maintenance of traffic roads) [107] 交通路の整備
(Development of towns) [108] 都市の発達 [△]
(Foreign Trade) [108] 外国貿易 [△]
Section 4. The Civilization of Tang Dynasty [110]

第四節 唐の文化

(Confucianism) [110] 儒学 [○]
(Taoism) [110] 道教 [○]
(Development of Buddhism) [110] 仏教の発展
(Literature—Prose and poetry) [112] 文学—文と詩
(Pictures) [113] 絵画 [○]
(Calligraphy) [114] 書道 [○]
(Chief Events of the Year) [115] 主な年中行事 [△]
(The Attitude Toward Foreigners) [115] 外国人への態度
(Foreign Religion) [116] 外国の宗教
(Maniism) [116] マニ教 [○]
(Nestorianism) [117] ネストル [ネストリウス] 教 [○]
(Western Influence in Fine Arts and Crafts) [117] 美術工芸における西方の影響
(The Life of Tang People and the Western Culture) [117] 唐の人々の生活と西方の文化
(miscellaneous tricks) [118] 雑技 [○]
(Influence of Tang Civilization upon the West) 西方への唐文化の影響 [119]
(Character of Tang's Culture) 唐文化の性格 [119]

[全 119 頁]

⁵ 「目録」では「System and Social Economy of Tang Dynasty」となっている。

史料2：『東洋の歴史(2)』の内容構成(稿)

凡例

- ・ 出典は、History of the Orient- Upper Secondary, Vol. II, May 1950, CI&E, GHQ/SCAP Records, Box no. 5546 (国立国会図書館憲政資料室、CIE(A)04324- CIE(A)04326) である。
- ・ 記載は、編・章・節・項についての英語原稿での題目、[英語原稿での該当頁]、日本語訳である。
- ・ 作成者の注記は〔 〕で記載した。
- ・ 日本語訳に「東洋史」学習指導要領の記載をそのまま当てはめたものには〔○〕を、記載の一部を当てはめたものには〔△〕を付した。
- ・ 凡例に関わるその他の詳細は本稿「4」を参照されたい。

Part 3. How had the People's Living standard been Elevated[1]

第三編 庶民生活はどのように向上したか〔○〕

Preface[1]序説

Chapter 8. How People Elevated their Living[2]

第八章 庶民はどのように生活を向上させたか〔△〕

Section 1. Civilism of Sung Dynasty and Development of Party Conflict[2]

第一節 宋の文治主義と党争の展開〔△〕

(Civil War at the end of Tang Dynasty and separation of the Five Dynasties)[2]唐末の内乱と五代の分裂〔○〕

(The Unification by Sung)[4]宋の統一〔○〕

(The Civilism of Sung Dynasty)[4]宋朝の文治主義〔○〕

(Transaction between Sung, Liao and Si-hsia)[5]宋の遼及び西夏との交渉〔○〕

(The Reform of Wang-an-shek)[6]王安石の改革〔○〕

(Development of party conflict)[8]党争の展開〔○〕

(Conflict between Sung and King, Southward moving of Sung)[9]宋・金の衝突と宋の南遷〔○〕

(The Negotiation between Kin and South Sung)[10]金と南宋との交渉〔○〕

(Party Conflict of South Sung)[11]南宋の党争〔○〕

(Relation between South Sung, Kin and Yuan)[11]南宋と金及び元との関係〔○〕

Section 2. Industrial Development and Rising of Commercial Cities[12]

第二節 産業の発達と商業都市の勃興〔△〕

(Development of agricultural production)[12]農業生産の発達〔○〕

(Development of industrial production)[13]工業生産の発達〔○〕

(Development of coin economy and increase of mine production)[15]貨幣経済の発達と鉱業生産の増大〔○〕

(The rise of commercial cities)[16]商業都市の勃興〔○〕

(Development of foreign trade)[19]外国交易の発展〔○〕

Section 3. Construction of New Culture and Improvement of National life[20]

第三節 新文化の建設と庶民生活の向上〔△〕

(Encouragement of Learning in the early Part of the Sung Period, and Rise of New Culture) [20] 宋初における学芸奨励と新文化の発生〔○〕

(Establishment of New Confucianism) [21] 道学〔朱子学〕の成立〔○〕

(Advance in Historical Science, Geography, Science, etc.) [22] 史学・地理学・科学等における発達〔△〕

(Advance in Literature) [24] 文学の発達〔○〕

(Rise in Art) [25] 美術の発達〔○〕

(Buddhism and Taoism) [26] 仏教と道教〔○〕

(Elevated commoners' life) [27] 庶民生活の向上〔△〕

(Prosperity of town life) [27] 都市生活の繁栄〔○〕

(Mutual aid of village) [29] 農村の相互扶助〔△〕

Chapter 9. Increase of the Northern Power and Eastward pervasion of the Islamic Civilization [31]

第九章 北方勢力の増大とイスラム文化の東伝

Section 1. The Rise of the Liao and Chin Dynasties and Influence of Chinese Civilization upon them [31]

第一節 遼・金の興隆と漢文化の影響〔△〕

(Foundation of Korai dynasty) [31] 高麗の建国〔○〕

(The prosperous era of the Liao Dynasty) [31] 遼の強盛〔○〕

(The Rise of Hsi-hsia) [33] 西夏の興起〔○〕

(The Rise of the Chin Empire and the Fall of the Liao Empire) [31] 金の興起と遼の滅亡〔○〕

(Establishment of the Western Liao Dynasty) [34] 西遼の建国〔○〕

(Prosperity of the Chin Empire) [34] 金の隆盛〔○〕

(Influence of the Chinese civilization) [35] 漢文化の影響〔△〕

(The Civilization of the Liao Empire) [36] 遼の文化〔○〕

(The Civilization of the Hsi-Hsia Empire) [36] 西夏の文化〔○〕

(The Civilization of the Chin Empire) [36] 金の文化〔○〕

Section 2. Development of the Mongolians, Fall and Rise of the Yuan Dynasty [38]

第二節 蒙古民族の活躍と元朝の盛衰〔△〕

(The Rise of the Mongolians) [38] 蒙古の興起〔○〕

(Conquest of the Central Asia) [38] 中亜の経略〔○〕

(Falls of the Hsi-Hsia and Chin Dynasties) [39] 西夏及び金の滅亡〔○〕

(Invasion in Europa) [39] 欧州の遠征〔○〕

(Conquest of the Central Asia) [40] 中亜の経略〔○〕〔「西亜の経略」か〕

(Establishment of Yuan Dynasty) [40] 元朝の成立〔○〕

(The fall of the Southern Su Dynasty) [41] 南宋の滅亡〔○〕

(Subordinating of Kaoli, the relation between Yuan and Japan) [41] 高麗の服属と日・元の関係〔○〕

(Conquest of southern nations) [42] 南方諸国の経略〔○〕

(Territories of the Yuan Dynasty and four Khan Kingdoms) [43] 元朝及び四汗国の領域 [○]
(Domestic Administration of the Yuan Dynasty) [44] 元朝の内政 [○]
(Decline of the Yuan Dynasty) [45] 元朝の衰亡 [○]
(Decline of the Four Khan Kingdoms) [46] 四汗国の衰退 [△]

Section 3. The Eastward Introduction of Islamic civilization and Yuan dynasty's civilization[47]

第三節 イスラム文化の東伝と元代の文化 [△]

(Development of traffic between the West and the East) [47] 東西交通の発達 [○]
(The Western's visiting to China) [47] 西人の来朝 [○]
(Influence of Islamic civilization upon Han's one) [48] イスラム文化の漢文化への影響
(Introduction of Christianity) [49] キリスト教の伝来
(Characteristic of the Mongolian culture) [49] 蒙古文化の性格
(Buddhism and Taoism) [50] 仏教と道教
(Learning and Arts) [51] 学芸 [△]
(Social life) [52] 社会生活 [△]

Part IV. How the Old Orient attained maturity[53]

第四編 古い東洋はどのように老成したか [○]

Preface[53] 序説

Chapter 10. State of Affairs in Central Asia and India[55]

第十章 中央アジアとインドの情勢

Section 1. Rise and Fall of the Timur Dynasty[55]

第一節 チムール朝の興亡 [○]

(Timur Khan) [55] チムール汗

(Foundation of a Great Empire by Timur) [55] チムールによる大帝国の創設

(Decline of the Timur Dynasty) [56] チムール朝の衰退

(Culture of the Timur Dynasty) [57] チムール朝の文化

(Central Asia after Timur) [58] チムール後の中央アジア

Section 2. Rise and Fall of the Mughal Empire[60]

第二節 ムガル帝国の興亡

(Invasion of the Muslims into India) [60] インドへのイスラム教徒の侵入 [△]

(Age of the Pathan Kingdom) [60] パターン王朝の時代 [○]

(Foundation of the Mughal Empire) [61] ムガル帝国の建設 [○]

(The Reign of King Akbar) [62] アクバル王の治世

(Religious Policy of King Akbar) [62] アクバル王の宗教政策

(Mughal Kingdom after Akbar) [63] アクバル後のムガル王国

(The League of the Maratha Lords and Afghan Kingdom) [64] マラータ侯の同盟とアフガン王国 [△]

Chapter 11. How the Chinese were Revived[66]

第十一章 漢民族はどのように復興したか

Section 1. Rise of Ming Dynasty[66]

第一節 明の興隆

(Founding of the Ming Kingdom) [66] 明の建国 [△]
(Decline of the Northern Yuan Dynasty) [67] 北元の衰亡
(Territorial Expansion) [68] 領土拡大 [△]
(Situation of the Korean Peninsula) [68] 朝鮮半島の状況
(Annam and Loochoo) [69] 安南と琉球 [△]
(Expedition to the Southern Seas) [69] 南海遠征 [△]
(Readjustment of the Imperial Administration) [70] 帝国統治の整備 [△]
Section 2. Fall of Ming Dynasty [72]

第二節 明の滅亡

(The Construction of the Great Wall and the frontier-Barrier) [72] 長城と辺牆の建設 [△]
(Invasion of Essen and Altan) [73] エセンとアルタンの侵入
(Tribute trade) [73a] 朝貢貿易
(Downfall of Ming Dynasty) [75] 明の崩壊 [△]
Chapter 12. How was Prosperous the Koki and Kenryu Era [78]

第十二章 康熙・乾隆時代の繁栄はどのようなものであったか

Section 1. The Rise of Manchurian Peoples and their Expansion toward China [78]

第一節 満州民族の興隆と彼らの中国への拡大

(The Foundation of latter King) [78] 後金の建国 [○]
(Ching Captures Shan-hai-kuan) [78] 清の山海関獲得 [「入関」か] [△]
(South Ming's _____ against Sing) [79] 南明の対清 [] [「抗戦」か] [△]
(The rebellion of the Three Clans) [80] 三藩の乱 [○]
Section 2. Koki and Kenryu Era [81]

第二節 康熙・乾隆時代

(The Expansion of Sing's Territory I- Manchuria) [81] 清の領土拡大 I 満州 [○]
(The Expansion of Sing's Territory II- Mongolia) [81] 清の領土拡大 II 蒙古 [○]
(The Expansion of Sing's Territory III- Tibet) [82] 清の領土拡大 III チベット [○]
(The Expansion of Sing's Territory IV- Sin-Kiang) [83] 清の領土拡大 IV 新疆 [○]
(The Characteristics of Sing's Superintendence of Mongolia) [83] 清の蒙古統治の特色
(Sing's _____ and _____ States Indo-China) [86] [清の_____とインドシナ_____]
(The Characteristics of Manchu Rule of China) [88] 満州の中国統治の性格
Chapter 13. How Chinese Society and Civilization were Improved [90]

第十三章 中国の社会と文化はどのように向上したか

Section 1. Social and Economic Progress [90]

第一節 社会と経済の発展

(Colonization of the Chinese) [90] 漢人の拓殖 [△]
(Means of Communication) [91] 交通の整備 [○]
(Progress of the Pang or Guild) [93] 職業団体 — 幫の発達 [△]
(Circulation of Silvers) [94] 銀の流通 [△]
(Payment of Taxes with Silvers) [95] 税の銀納
(Li-Chia system) [96] 里甲制 [△]

(Pao-chia system) [97] 保甲制 [△]

Section 2. Thought and Culture [99]

第二節 思想と文化

(Degeneration of Buddhism and Taoism) [99] 仏教・道教の墮落 [○]

(_____ of the Chu-tsu School) [100] 朱子学の [] [「沈滞」か] [○]

(Theory of Wang Yang-ming) [101] 王陽明の学説

(Development of Pragmatic studies) [101] 実学の発達 [○]

(Development of the Objective Method of Textual criticism of Classics) [102] 考証学の
興隆 [○]

(Drama and Novel) [104] 戯曲と小説 [△]

(Painting and Architecture) [105] 絵画と建築 [△]

(Improvement of Industrial Arts) [106] 工芸の向上 [△]

(Reformation of Lamaism) [107] ラマ教の改革

Part V. How the Orient is being Modernized [108]

第五編 東洋の近代化はどのように進んでいるか [○]

Preface [108] 序説

Chapter 14. How did Western Countries move to Orient [109]

第十四章 西洋諸国はどのように東洋に到達したか

Section 1. The Eastward Advance of the European Countries [109]

第一節 ヨーロッパ諸国の東漸

(The Traffic between Europe and Asia) [109] ヨーロッパとアジアとの交通

(Portuguese Spice trade) [109] ポルトガルの香料貿易

(Spain Gets the Philippines) [110] イスパニアのフィリピン獲得

(The Decline of Portugal and Spain) [110] ポルトガルとスペインの衰退

(Dutch Administration of The East Indies) [111] オランダの東インド統治

(The British Administration on India) [112] イギリスのインド統治

(Russian Advance toward Siberia) [112] ロシアのシベリアへの進出

Section 2. The European Countries and China⁶ [113]

第二節 ヨーロッパ諸国と中国

I. _____ [113] [判読不能]

(The Relation with Japan) [113] 日本との関係

(Portugal and China) [113a] ポルトガルと中国

(Spain and China) [114] イスパニアと中国

(England and China) [114] イギリスと中国

(Russia and China) [115] ロシアと中国

II. European Culture and Chinese Culture [116] ヨーロッパ文化と中国文化

(The Incoming of Christianity) [116] キリスト教の伝来

(_____) [117] [判読不能]

⁶ 本文中で読み取れないため「目録」により記載した。

(The Influence of European Culture on China) [118] 中国へのヨーロッパ文化の影響
(The Influence of Chinese Culture on Europe) [119] ヨーロッパへの中国文化の影響
Chapter 15. Why did old Orient Collapse?⁷[120]

第十五章 古い東洋はなぜ崩壊したか [△]

Section 1. Europe Countries Administration of Orient⁸[120]

第一節 ヨーロッパ諸国の東洋支配

(The Establishment of British India) [120] 英領インドの成立
(The Establishment of British Strait Settlements) [120] 英領海峡植民地の成立
(British _____ of _____) [121] [「イギリスのビルマ併合」か]
(The Establishment of French Indo-China) [121] 仏領インドシナの成立
(Russian advance in the Orient) [122] 東洋でのロシアの進出
(Russian Advance to Central Asia) [123] 中央アジアへのロシアの進出
(Japanese Annexation of Korea) [123] 日本の朝鮮併合

Section 2. Foreign Strength's Permeation to China⁹[125]

第二節 外国勢力の中国への浸透

(England and China) [125] イギリスと中国
(Opium Problem) [125] アヘン問題
(Opium War) [126] アヘン戦争 [△]
(The Arrow War) [127] アロー戦争 [○]
(Foreign Trade) [128] 外国交易
(The Propagation of Christianity) [128] キリスト教の布教
(The Rights and Interests after Sino-Japanese War) [129] 日清戦争後の権益
(The Open-door Policy) [130] 門戸開放政策

Section 3. The Fall of the Sing Dynasty¹⁰[132]

第三節 清朝の滅亡

(The Confusion of _____ Administration) [132] [_____] 政治の混乱
(_____) [133] [判読不能]
(The Absorption of Material Civilization) [133] 物質文明の受容
(The Political Change in 1__8(____)) [135] [「1898年戊戌の政変」か¹¹]
(The _____ of the European Culture) [136] ヨーロッパ文化の [_____] [_____] [137] [判読不能]
(The disturbance of the Boxers) [137] 義和団の乱
(_____) [138] [判読不能]
(_____) [139] [判読不能]
(The Fall of the Sing Dynasty) [140] 清朝の滅亡

⁷ 本文中で読み取れないため「目録」により記載した。

⁸ 本文中で読み取れないため「目録」により記載した。

⁹ 本文中で読み取れないため「目録」により記載した。

¹⁰ 本文中で読み取れないため「目録」により記載した。

¹¹ 1908年戊申の「清末の改革」の可能性もある。

Chapter 16. The Growth of New Orient¹²[141]

第十六章 新しい東洋の成長

Section 1. The Growth of New China¹³[141]

第一節 新しい中国の成長 [△]

(_____ of the Chinese Republic) [141] 中華民国の [_____] [「出現」か] [○]

(_____) [142]¹⁴ [判読不能]

(Outer Mongolia) [142] 外蒙古

(The Dispute Between Japan and China) [145]¹⁵ 日中間の紛争

(Promulgation of the Constitution) [149] 憲法の発布

(_____) [149] [判読不能]

Section 2. Culture and Economy of Modern China [152]

第二節 現代中国の文化と経済

(New Cultural Movement) [152] 新文化運動 [○]

(Cultural Revolution) [154] 文化革命 [「文学革命」か]

(New Life Movement) [155] 新生活運動 [○]

(Chinese Economy during the First world war) [156] 第一次世界大戦時の中国経済

(Reformation of Monetary System) [157] 幣制改革 [○]

(Economic construction) [158] 経済建設 [○]

(Modernization of China) [159] 中国の近代化

Section 3. Present Situation of Korea and Southeast Asia [161]

第三節 朝鮮と東南アジアの現状

(India) [161] インド [○]

(Burma) [162] ビルマ [○]

(Siam) [163] シヤム [○]

(Indo-China) [165] インド=シナ [○]

(East Indies) [166] 東インド [インドネシア] [○]

(The Philippines) [167] フィリピン [○]

(Korea) [170] 朝鮮

(Present East Asia) [170] 現在の東アジア

[全 177 頁¹⁶]

¹² 本文中で読み取れないため「目録」により記載した。

¹³ 本文中で読み取れないため「目録」により記載した。

¹⁴ 143 頁に 143a、143b、143c が挿入されて、米国の中国政策についての長文の説明が述べられている。

¹⁵ 146 頁に 146a、146b が挿入されて、日中の紛争について詳述されている。

¹⁶ 「目録」には最後に「Bibliography」(参考文献)と記載されているが、本文中には存在しない。